



金山亮太, 『サヴォイ・オペラへの招待 — サムライ、
ゲイシャを生んだもの』

Ryota KANAYAMA, *Invitation to the Savoy Opera*

(70 頁, 新鴻日報事業者,

2011 年 1 月, 本体価格 1,050 円)

ISBN: 9784861324321

(評) 新井潤美

Megumi ARAI

イギリスのダービシャーにバックストーンという町がある。ここは鉱泉が湧き出るので、スパ・タウンとして知られていて、「バックストーン・ウォーター」というミネラル・ウォーターの産地でもある。一方、バックストーンというと、水ではなくて「サヴォイ・オペラ」を思い出す人もいるが、それはかなり熱心なサヴォイ・オペラ・ファンだろう。バックストーンは国際ギルバート・アンド・サリヴァン・フェスティバル (International Gilbert and Sullivan Festival) の開催地であり、毎年八月にイギリスだけではなく、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏から、サヴォイ・オペラを上演するプロフェッショナルおよびアマチュアの団体、そしてサヴォイ・オペラのファンが集まり、3 週間ばかり、この町のオペラ劇場やその他のホールでサヴォイ・オペラが上演され、各種のイベントが催されるのである。

「サヴォイ・オペラ」の通称で知られる、劇作家 W・S・ギルバートと作曲家のアーサー・サリヴァンが組んで作った一連のコミック・オペラはイギリス文化の中で独特の位置を占める。学芸会でおなじみの演目であり、イギリス文化の重要な部分とみなされている一方で、「サヴォイ・オペラ」が好きだと公言することは時と場合によっては勇気がいるし、「サヴォイ・オペラ」ファンは「ミドル・クラスでミドル・ブราวでミドル・エイジ」といった、一つのステレオタイプが存在する。さらに近年では人種差別的であるとか、女性蔑視的であるとか、スノビッシュであるなどの批判を受け、イギリスの公立学校ではあまり歓迎されていないのが現状のようだ。ロンドンの劇場でも上演されることは少なく、ロイヤル・オペラ・ハウスで上演されることもほとんどない。一方では「イギリスの伝統文化」と言われながらも、「サヴォイ・オペラって何？」という人も多い。

実際、サヴォイ・オペラとは何なのか。金山亮太氏の『サヴォイ・オペラへ

の招待』はそれを見事に解き明かしてくれる。これは新潟大学大学院現代社会文化研究科から刊行されている、高校生向けの「ブックレット新潟大学」の一冊であり、70ページばかりの短い本だ。副題が「サムライ、ゲイシャを生んだもの」とあるから、サヴォイ・オペラの中で今でももっとも人気のある『ミカド』にのみ焦点を当てた解説書かと思うと、そうではない。

第一章「サヴォイ・オペラとは何か」では、ギルバートとサリヴァンについての解説、サヴォイ・オペラの作られた背景などが分かりやすく説明されているが、それだけではない。シェイクスピアまでさかのぼって、イギリスの演劇とその受容、イギリスにおけるオペラ受容、イギリス的オペラの台頭、さらにエドワード・リアやルイス・キャロルのナンセンス・ライムズに目をむけながら、著者はヴィクトリア朝の中産階級の観客にサヴォイ・オペラがあれほどの人気を得た理由を分析する。サヴォイ・オペラについて書かれた英米の解説書の多くがヴィクトリア朝の文化や社会的背景にのみ目を向け、そこから出ることがないのに比べて、本書はより大きなパースペクティブの中でサヴォイ・オペラをとらえ、イギリス文化におけるその位置を明確にする。著者は「本格的オペラほど肩が凝(こ)らず、大衆演劇よりは品の良い音楽劇はないものか。でも、古典劇や仮面劇には興味がないし、今さら一から外国語を勉強する気もない。こういった新興中流階級の核をなしていた人々こそ、のちにサヴォイ・オペラの支持者となったのでは」と、サヴォイ・オペラの観客を実に簡潔に、少々辛辣に定義するが(10-11頁)、一方で同時にこういった、ミドル・ブラウの人々に対して、「彼らは変に知ったかぶりや背伸びをするのではなく、自分たちに評価可能なものだけを受容する、いわば「等身大」の生き方を好んだのでは」という肯定的な評価を添えることで(9頁)、バランスを保っている。特に日本の高校生を意識した本書において、このようなアプローチのしかたは重要であり、サヴォイ・オペラを「イギリスの伝統文化」としてひたすら誉め上げるわけでも、あるいは反対に「偏狭なミドル・クラスの文化」として批判して、‘patronize’するわけでもない。きわめて「公平」かつ客観的な視点から書かれているのである。

第二章「ナンセンスな笑いとお世相風刺」では通常サヴォイ・オペラの第一作目とされる『陪審裁判』をはじめとするいくつかの作品が取り上げられ、その簡単なあらすじと特徴が述べられている。また、ギルバートとサリヴァンのパートナーシップに伴った問題や苦悩が書かれているが、ここでも、サリヴァンの「真面目な」作曲とギルバートの「ナンセンスな脚本」とのミスマッチという、サヴォイ・オペラの特徴とされる点について、「本場ヨーロッパの作曲家たちにも負けないほどの技量をサリヴァンが発揮し、それがイギリス

人好みのナンセンスな筋立てによって台無し（という表現が刺激的過ぎるのであれば、浪費されるとでもいいでしょうか）にされるのを当時の観客は密かに喜んでいたようにすら見えます」と指摘し（31頁）、それを「先進的な大陸文化に対するイギリス側からの陰湿な復讐ふくしゅうと見ることも可能です」と興味深い解釈を加えている（31頁）。

このように本書はサヴォイ・オペラについての基本的な情報を提供し、限られた字数の中できわめて的を射た、明快な解説をしているだけでなく、従来の解説書とは違った視点からの分析や解釈をも盛り込んでいるのである。さらに第三章『『ミカド』と日本』では、サヴォイ・オペラで今でも最も人気があると言えるこの作品が生まれた経過や、ロンドンの「日本村」の説明に加えて、当時のイギリスにおける日本の知名度を、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』や、*Quarterly Review* の記事といった多様な例を挙げながら解説している。その上で、『『ミカド』の中の日本は、日本という国のパロディーですらなく、虚構の日本という記号の上に、さらに屋上屋を架すがごとき操作によって作られたものであり、むしろ仮想現実的空間として彼らが割り切って楽しんでいたと考えた方がよいでしょう」と説明するのだが（48頁）、さらに、この「仮想現実的空間」であった『ミカド』の日本が、その人気故に結局は「今日の西洋人の日本イメージに根強い影響を及ぼしている」ことを指摘するだけでなく（54頁）、現代の日本自身が、そのイメージに「すり寄って」いる現象を提示している。

そして第四章「ノンポリの政治性」においては、著者はまずアメリカ、そして南アフリカにおけるサヴォイ・オペラ愛好演劇集団の分布に目を向け、「一見したところは日和見主義のお気楽な」サヴォイ・オペラが「今やそれが上演された当時のヴィクトリア朝人たちの自己イメージを反映したものとして、ポスト植民地時代を生きる現代イギリス人に歴史観の再検討を迫る」存在として、その受容とイメージの変遷、そして現代イギリス文化におけるその位置を明らかにするのである（57頁、66頁）。

本書はこのようにサヴォイ・オペラに関する基礎知識、背景、ステレオタイプをわかりやすく説明しながら、イギリスの社会、階級、演劇、音楽、アイデンティティなど、じつに様々な要素を解説している。冒頭で述べたように、「高校生向けの解説書」という本書の趣旨と限られたページ数という制約を受けながらサヴォイ・オペラのエッセンスを押さえ、さらに新しい視野と見解を提供する著者の手腕には感銘を受ける。次はぜひ full-length のサヴォイ・オペラ論を期待したい。